42 期生

④自閉症者援助技術

課題：あなたの職場で実践した自閉症児・者の「問題行動」の解決とより自立した生活に向けた取り組みについて論述しなさい。

当事業所での自閉症の問題行動の理解と、自立に向けた取り組みについて1つの事例を基に述べる。

自閉症のAは、知的レベルは高くIQ55程度、簡単な会話なら、言葉によるコミュニケーションを取ることができる。文字に興味があり、一般的には使われないような難しい字を理解している。時計も読むことができる。しかし、こだわりが強く、1日の流れをルーティーンで理解している。一つひとつの行動を行う前に「しなくては次の行動に移れない」こだわり行動があり、食事や入浴等時間通りに行動することが難しい。1～2時間遅れることが多い状態だった。しかし、こだわり行動を行っている時に職員が声かけ等を行なうと大きな声を出す・壁を叩く等の興奮状態に陥る。そのような大きな声や壁を叩く等の行動により、他の利用者の情緒が不安定になる事も多い。日課への参加は無く居室で寝ている。もしくは、居室のベッドの上で日記を書いて過ごしている状態。職員としては、「本人に日課への参加を促すこと」、「ある程度時間を守ることができる」、「イスに座って活動を行うことができること」この3点を『自らの意思で無理のないように行動することができる様に支援を行なうこと』を職員間の目標とした。

そこで、1日の日課を理解することができるようにスケジュール表を作成しAに伝えた。時間と日課をマジックテープで張り付け、その活動が終わればマジックテープを外し「終わりボックス」に入れる形式のものを作成した。イスに座って活動を行うことができる様に、Aの興味を示している文字を使ってみる事になる。Aは何時も漢字の辞書を持ち歩いている。その辞書の漢字をノートに1ページ書き取りを行ってもらうことを課題とした。また、本人が書き取りに集中することができる様にパーテーションを使用し、外部からの視覚刺激を少なくするように配慮した。しかし、日課を提示したり、活動を示すだけでは、本人からの日課や活動に対する意欲（動機付け）が無く、今まで同様に居室に帰ってしまう状態が続いた。そこで、本人の意欲を上げるために「トークンエコノミー法」を取り入れることにした。トークンエコノミー法とは、お店のポイントカードの様に、良い行動を行なえばポイントがもらえ、ポイントが一定量溜まればご褒美にお菓子をもらうことができる。良くない行動であれば、ポイントをもらうことはできない。本人が何かのために頑張ることができ、また、それを視覚的に伝えることができる手法である。職員からの声かけを行うことで興奮状態になる事が多かったため、自分から活動への参加を行うことが重要と考えた。決められた時間までに自らデイルームに来ることができればお菓子をもらうことができるようにした。その後、「イスに座る」、「書き取りの準備を

PURC Site

する」、「書き取りを行う」、「時間までに書き取りの片づけを行なう」。それぞれの項目でポイントをもらい、一定量たまればお菓子を渡した。本来のトークンであれば、適切でない行動を行うとマイナスポイント等もあるが、Aには成功体験から学ぶことが望ましいと考え、プラスポイントだけで行った。トークンを取り入れることでAは自らデイルームに来て書き取りの活動を行なうことができる様になった。しかし、問題が1つ出てきた。それは「時間」である。

Aは時計を読むことができた。職員からの「今何時ですか」の問いに正確な時間を伝えることができた。このことから、職員は、Aは時間を理解することができているという思い込みがあった。しかし、実際は時計を読むことができるが「○時までに」のように時間の流れを理解することができていなかった。Aは自らイスに座り書き取りを行うことができるようになった。しかし、時間を過ぎていることによりお菓子が貰えないことの理解が難しく、興奮状態になることが多くあった。そこで、時間を分かりやすく伝えるためにタイムタイマーを使用することにした。タイムタイマーを使用し、残りの時間を視覚的にAに伝えることで、時間の流れを視覚的な方法で理解することができた。タイムタイマーを使用することで、入浴や食事等にもトークンを取り入れ、自ら活動に参加することができるようになった。

今回の事例における自立とは、一つひとつの行動を職員の指示で行うのではなく、自分のすべき行動を自ら理解し行動に移すことができる。それは大きな自立と言える。自閉症と言う障害は十人十色である。表に出てくる問題行動は様々であるが、まずは、自閉症の特徴を理解することが重要だと言える。また、自閉症者は私たちと違う感覚を持っている。その違いを支援者が理解したうえで、本人らしくそれぞれの自立に向けた支援が必要である。

講評：

利用者の自閉症としての特性を把握し、支援者側がわかっているだとうと考えていた個人評価も、実は理解していないのではないかと見直しができている。今回の支援を振り返ると、周囲はこだわりと考えていた行動前の儀式も、実際は時間感覚の弱さや見通しが持てないためにしていたことなのかも知れない。自らの意欲によって支えられた生活を実現することで、相対的に問題行動の軽減が図ることができたという結果がよくわかるレポートであった。